

彫刻刀

森岡 正作

雪降りぬ

鬚のやうに衿立て人を避く
網元の不漁を託つ枯木星
明王の木彫りの火焰冬ざる
猪鍋の次第に肩の勇み出す
短日を削ぐ鈍色の彫刻刀
たられればの悔い多き日や虎落笛
厳格に程とほき父花八手

今年はこの三年程の暖冬と違って寒く雪も多いと言う。既に昨年末に日本海側が大雪となった。登四郎先生の『冬の音楽』という句集に（雪降りぬ忘れるほどに遠くの日」という句がある。この句には、今眼前に雪が霏霏と舞っているのか、雪が降り積もった状態なのかという点と、「遠くの日」が雪の記憶を掘り起こしているのか、雪を前にして遠い日の出来事を回想しているのかなどと、いろいろ考えさせられる。

私の勝手な解釈と思い入れであるが、降りしきる雪を見つめながら、先生の遠い日の忘れ得ぬ想い出に耽る姿と思いたい。雪はしんと降りるとよく言うように辺りが無音と化し、遠くの景色を遮るようにのんと降る。物静かな心持で窓辺を見つめる姿、雪にはもの思いがよく似合うのである。